

宮城学院女子大学

Partir

[パルティール]

VOL.

20

2015.10

あなたのこれからに贈りたい
Live Letter from MG



誌上セミナー

理科を通じての「学び」に関する
分析結果とその検証について

05 学問へのいざない

「学者の目で興味を見出すこと」を学ぶ
「ジェンダー的視点」を養う

07 特集

2016年新学部が誕生！

09 ACTION

「食づくり」による被災地支援で
関東学院大学とコラボレーション！

11 My way MG way

卒業生の仕事場訪問

13 サークル紹介

14 CAMPUS NEWS

15 MGにこの人あり

「マーガレット・A・ガーナー」

「Partir (パルティール)」はフランス語で「出発する」
新しい時代に飛び立とうとする女性たちを支援、励ますために、
宮城学院女子大学から発信するコミュニケーション情報誌です。

理科を通じての「学び」に関する 分析結果とその検証について

それぞれのテーマに対し立てた仮説を元に、対象へのアプローチ手法を考える

自然体験が子どもたちの
感受性をより深める

板橋 皆さんはこのゼミで「理科を通じての学び」という大きなテーマをもとに、それぞれの切り口で卒論テーマを設定し、考察を進めてきたと思います。本日はあら



板橋夏樹准教授

ためて9人それぞれ、自分のテーマとそれに対するアプローチ手法、そこからの気持ちについて発表してもらいます。

久松 私は「自然体験がもたらす子ども
の社会性への影響」について調べています。

2年前から「仙台YMCA」の活動に関わり、子どもたちとの野外活動に同行させてもらっているのですが、そこでの子どもたちの成長が非常に興味深いんです。

伊藤 具体的にはどんな部分？

久松 2年前までは虫が触れず泣いていた子どもが、今では海パン一丁で「捕まえたー」ってニコニコしている。そこで「自然体験が子どもに何らかの影響を及ぼしている



児童教育学科

板橋夏樹准教授

[4年生卒業研究演習のみなさん]

岩淵凜さん、伊藤文佳さん、鎌田香純さん、
久松史奈さん、長谷部千尋さん、阿部梨沙さん、
高橋玲菜さん、星亜香菜さん、山内友紀菜さん



伊藤文佳さん



久松史奈さん



高橋玲菜さん

のではないか」という仮説を立て、その裏付けをしたいと思います。実は「自然体験をたくさんした子どもは、そうでない子どもと比べて感情表現が豊かで、感受性が強い」という論文もあって、具体的にどんな自然体験が、子どもたちにどう影響を及ぼすのかを掘り下げられるといいなと考えています。

伊藤 私は「子どもたちの『理科離れ』がなぜ起きているのか」について調べています。「理科が好きではない」という子どもたちが増えている、というデータを見つけて、その理由を探りたいと考えました。実は久松さんのテーマと重複しますが、一度

「自然が少なくなり、理科の知識を実感として得る機会が少なくなったからでは？」という仮説を立てていたのです。しかし先日の「全国学力・学習状況調査」で、理科の成績が思いの外よかったようで、「知識」自体は、自然体験と関わらず

きちんと身についていることがわかり、もしかして「理科が嫌いになる」、別の理由があるような気がしてきています。

久松 そうなんだーあらためて、アプローチをどう変えていくの？

伊藤 これまでは、ボランティアとして月2〜3回のペースで、小学校の授業見学をベースにしながら、もう少し広い範囲で文献を当たってみたいと思っています。最終的には、教育実習先で、調査結果を元にした試行授業を行ってみたいです。

板橋 おそらく「理科が嫌いになる」理由は、ケースバイケースかもしれないけれど、共通するエッセンスのようなものをつくって、そこから真理を導けるといいですね。

伊藤 おそらく地域差や環境差もありそうだと思うので、さまざまな角度から検証をしていきます。

高橋 私が今調べているのは「実感を伴っ



鎌田香純さん



岩淵凜さん



阿部梨沙さん

た理科』を叶える授業づくり」です。子どもたちが教室で学んだことを、日常の中で結びつけて考える機会つて思った以上にな少ない。最終的にはそこに焦点を当てた授業内容を考えたいです。

板橋 アプローチ方はいろいろあるけれど、より実感を伴うようにするためどうしたらいいだろう。

高橋 今考えているのは「生活の知恵」を、理科の知識で証明する方法です。例えば暑い日に「打ち水」を打つと涼しくなると言われている。その理由で、理科で得る知識で裏付けすることができそうですよね。

鎌田 気化熱？

高橋 そう。水が蒸発するときに、周囲の熱を奪っていくから涼しくなるんですね。こうした例をもっとたくさん持つことで、「なるほど」と感じられる授業にできたら、と考えています。

板橋 暑くなると人が汗をかくのも同じ



理由ですよ。あとは……「ツバメが低く飛ぶと、天気が悪くなる」とか。これは湿度の上昇と比例して羽が重くなるから。こうして上げていくと、もっともっと理科の中に「なるほど」を発見できそうですね。

あらゆる学年の児童に対応する子ども教室とは

岩淵 私は理科からやや離れてしまっていますが、母が「放課後子ども教室」のコーディネータをしている関係もあって、「放課後子ども教室のあり方」をテーマに、少し掘り下げるところです。

阿部 「放課後子ども教室」って、あまり知られていないかも。どんなものなの？

岩淵 宮城県では主に自治体が主体となっていて、教室によつてその内容はさまざまです。いわゆる体験学習に重きを置いているところもあれば、学校で



長谷部千尋さん



山内友紀菜さん



星亜香菜さん

の学習内容を補足するようなどころも。概ね良い結果を生んでいて、好意的に受け入れられているのですが、中には改善点と思われる部分もあって。実は対象学年を絞れない事情で、理解度の低い低学年にあわせた内容にならざるを得ない。そのため、どこも高学年の参加が少ないようなんです。

板橋 すべての学年の児童に対応した子ども教室にするための改善策を考えていくのですね。

岩淵 はい。今は文献をあたっているところですが、今後は私が住んでいる町の「放課後子ども教室」に協力を依頼して、アンケートやヒアリングをしたいと考えています。ここで見えてくる課題点が、「子ども教室」の改善に限ったことではなく、将来の子育てにも役立つ気がしているので、結果に期待しています。

長谷部 私が今調べているのは「教育施設

を学校教育で有効活用する方法」です。具体的には仙台市科学館の実践について書かれた論文を参考にしつつ、実際の取り組みをチェックし、その中で学校教育と連動できそうなものを拾っていく予定です。

山内 なぜ「仙台市科学館」を選んだの？

長谷部 科学館の集客がかなり少ないことが気になっていて。はじめは「参加型のイベントなど、興味を引く催しが少ないからではないか」と考えていたんです。でも調べていくとそうではなく、興味深い参加型イベントを多数企画しているんですね。もともとは「学校教育との連動」を軸に考えていたんですが、ここに来て「仙台市科学館を有効活用するために手法」も気になつてきて、どちらを軸にしようか迷っているところなんです。

阿部 私は、平成元年からスタートした小学校低学年の「生活科」と、3年生から始まる「理科」の関連について調べています。



板橋 現在の小学校では、1・2年次には「理科」「社会科」ではなく「生活科」の授業を受けるんですよね。

阿部 はい。現在は週2回のペースで小学校に行き、実際の「生活科」を見学させてもらっています。今は「アサガオの栽培」が中心ですね。「いくつ花が咲いた」「いくつ種が採れた」と喜んでる様子が微笑ましくして。今後、この学びをいかに3年生からスタートする「理科」につなげていくのか。今後はもっと先生方にお話をうかがい、「現場では、生活科をどのように位置づけているか」について、調べてみたいと思っています。

自分自身で調べて得た知見は必ず人生の糧になる

鎌田 私は「光電池」を使った教材を作り、そこで得た学びが、生活にどう生かされているかを、児童自身が気づくような授業を行うことが目標です。

星 なぜ「光電池」に着目したの？

鎌田 以前、私も「ソーラーカー」を作らされたことがあったんです。でもそれが「太陽光パネル」と同じものであることに、だいぶたつてから気がついて。それってなんだかもったいないな、と思ったことがきっかけです。気をつけたいのが「教材作り」であまり興味を引き過ぎると、子どもたちの意識が「完成させること」方向に行ってしまう、そこから学んで欲しい内容からはずれてしまう。いかに「学び」のポイントを外さず、かつ楽しく取り組んでもらうかを考えることが、今後の課題です。

山内 私は「小学生女子の理科に対する苦手意識」について調べています。「女子は理科が嫌い」という論文を目にして、ぜひそこを掘り下げてみたいなと思ったことがきっかけです。

板橋 以前、上越教育大学の稲田先生が「男女の脳の性差について」話したことがあったよね。

山内 はい。そこで「理科嫌い」が、脳などの生理的性差によるものなのか、それともジェンダー的社会的性差によるものか、ますます気になってきて。いろいろと論文を調べたところ、学会での意見は半々といった感じ。今後は小学校でアンケートに協力してもらい、より多くのケースを分析しながら検討をしていきたいと考えています。

星 私は「防災教育」をテーマにしています。「防災」というくくりはかなり広いですが、今回は特に「道徳」に特化し、「命を守るために必要なこと」「命の重さについて」を子どもたちにわかりやすく伝えるための授業を練っています。

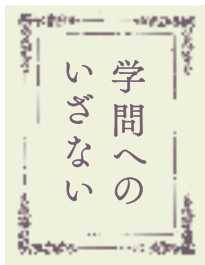
長谷部 仙台市は震災で甚大な被害を受けているし、「防災教育」もかなり進んでいるんだろうね。

星 私もそう睨んでいたのですが、実は現場に入ってみると意外に進んでいない。事情を聞くと「まだ震災の記憶が生々し

く、そこまで至らない」という話のようでした。しかし今後はどんどん「震災を知らない子どもたち」が入学してくる。今後は「震災を経験している子どもたち」と「知らない子どもたち」、それぞれに向けていかに道徳的観点から「防災」を教えることができるかについて、より深めていきたいと考えています。

板橋 あと残り4ヶ月。就職活動もあつて忙しい時期ですが、できるだけ文献のみのリサーチに留めず、実際の肉声を拾いながら自分なりの気付きを見つけて欲しいですね。その結果を卒業論文にまとめるわけですが、そこで得た知見はきっと、卒業後のみなさんの糧になるはず。ぜひ楽しんでテーマを深掘りしていつてください。





「学者の目で興味を見出すこと」を学ぶ

国際文化学科 J.F. モリス教授

気になるジャンルを
 深掘りし、学ぶ楽しさ

私は主に「日本文化論」の授業を担当しています。実を言うと私は高校卒業後、進路に迷っていました。家庭の事情もあり、高収入が見込める法学部に合格していましたが、入学直前に別大学から「アジアの言語を勉強するための奨学金がとれた」と連絡がきて、急遽専攻と大学を変えることになりました。生来の凝り性もあってか、それをきっかけに日本の歴史に興味を持ち、より専門的に学ぶため東北大学へ留学したんです。「南部藩と仙台藩の歴史」というテーマで博士論文も書きました。大学へ入る前までは日本のことを何も知らなかった私が、今では日本の歴史を研究テーマにし、来日してすでに40年以上も経つのですから面白いものです。ゼミでは「日本文化」という切り口で、



自分の好きなテーマで論文を書いてもらいます。学生によつてテーマは「香水」であったり、「お風呂」であったり、「トイレ」であったり、「成人式と着物」であったり。個人が興味のあるジャンルを、「日本文化」というテーマで深掘りをしていく作業を、ゼミの中で行います。

「学者の目でものごとを見つめる」に「面白さ」を発見する

3年次の前期では、まず「調べて書く」を学ぶための練習課題から始めます。高校を出たままの平均的な学生は、まず長い文章を読み込んだことがない。分析的な文章を読まされた経験がない。論文を書

くための語彙数が少ない。さらに1000文字以上の長文を書いた経験がない。こうしたくないづくしの状態から、論文を書くための「能力」をつけていきます。

そして後期からは自分で見つけたテーマで本番に入ります。中には「テーマが見つからない」という学生もいるんですが、そのときは「何なら興味を持って深掘りできるか」について考えさせます。でも本当は、テーマは何だつていいんです。要は「何もない」と思うところに、「学者の目」で潜んでいるものごとを発見することが大事。そして「こうかもしれない」という直感を調べ、考え、情報を整理し、そして自分が「面白い」と感じる部分が、第三者と共有できるような文章に落とし込むことが、一番の学びなんです。人間って「面白い」と思ったことしか必死になれないし、学習できないものなんです。まずは学びの場に「面白さ」を見つけて、ことが、一番大切なことだと考えています。

Profile

オーストラリア出身。1971年オーストラリア国立大学アジア研究学部入学。1974年から1984年まで東北大学文学研究科国際研究室に留学。専門の仙台藩の歴史についての論文・著書多数。ほかにも、オーストラリアの歴史および現代の多文化共生についての論文もある。◎信条「人間万事塞翁が馬」

私のおすすめ本

戦争における「人殺し」の心理学

デーヴ・グロスマン著、安原和見訳

米陸軍特殊部隊・グリーンヘラーの教官が「人を殺す」行為に疑問を抱き、戦争で実際に人を殺した兵士からのヒアリングを重ね、歴史的、考古学的、心理学的アプローチで「人殺し」を考察していきます。テーマは重いですが、もはや他人事では無くなっている問題です。



これが学びのツボ!

学習に「面白さ」を見つけるって難しい!と思われる方も多いですね。でもどんな領域であれ、先生方の話すことに耳と心を拓いてみると、その中に面白いものがきっと見つかる。ぜひ、「学者の目」でそれを発見してください。



「ジェンダー的視点」を養う

一般教育科 天童陸子教授

「実感」として存在する不自由さの構造を知り、解決するための学び

まず私が「女性学」「ジェンダー研究」を専門とするようになった経緯をお話しします。もともと大学では社会学を学んでいて、その後就職。そして結婚、出産による退職を経た後、「子育てをしながらの再就職」にチャレンジしたわけですが、そこで大いなる厳しさを目の当たりにしたんです。「子を持つ母」の就職が難しいのは、個人の能力ややる気とはまた別の、「日本の社会に構造化された問題」ではないだろうか。ではなぜ、そうした構造が生まれるのか。それを専門的に学びたいと思い、30代半ばで大学院に戻りました。女性ならではの生きにくさはなぜ生まれるのか、どうしたら変えられるのか。社会に構造化された問題を解決するために、広い視野から女性のエンパワーメントについて学びたいと思ったわけです。

教員としてはこれまで其学の総合大学にりましたが、かねてから次世代の女性に向け、女性の支援に結びつく教育がしたいと考えていたこと。そして過日の震災後、ささとである宮城や東北の役に立ちたいと考えてたところに良き出会いがあり、2015年より本学で務めることとなりました。

あらゆる領域を新視点で捉え直す「目」を養い、育てる授業

現在は「女性学とはなにか」ということを、「女性と人権」科目で全学科の1年生に教えています。「性差別」があまりにも深く社会に根ざしているため「差別自体に気づかない」ということが往々にしてあります。性による役割分業など、当たり前に見えることも角度を変えれば、そこに隠れた性差別が見えてくる。それに気づく「目」、すなわちジェンダー視点を養うことが番のテーマです。歴史という縦軸と、国際社会と

いう横軸からの比較。この授業を通じ、学生は新しいものの見方を獲得していきます。

女性たちの息苦しさや不平等がなぜ続くのかを問い、私たちが社会や文化のあり方を考え直すことで、その状況を変える可能性を探る。問題への深い理解と実践的アプローチを合体させられることが、女子大で学ぶ意義であると考えています。「女性学」はさまざまな学問に通じています。自分なりのジェンダー視点を持つて、今後の学びの領域をさらに自由に、大きく拓いていってください。



Profile

宮城県仙台市出身。早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程修了。博士(教育学)。名城大学人間学部教授を経て、2015年より現職。現在、国際ジェンダー学会理事。主な著書(共著)に『都市環境と子育て：少子化・ジェンダー・シティズンシップ』『育児戦略の社会学』『ジェンダーと教育』など。○信条「愛を持って生きる」

私のおすすめ本

よくわかるジェンダー・スタディーズ

～人文社会科学から自然科学まで～
木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江・編著
「女性学」「ジェンダー研究」「フェミニズム」って何だろう?と思う人に向け、学際的な視点で書かれたおすすめ本。冒頭から順に読むのももちろん、百科事典的に気になる部分をピックアップして読んでもわかりやすい良書です。



これが学びのツボ!

女性学、そしてジェンダー研究はどの学問にも応用ができる「領域横断的」な学問です。自分の興味関心の領域にジェンダー的視点でアプローチすることで、これまで気づけなかった部分が見え、理解がより深まるはずですよ。

2016年 新学部が誕生!

学院創立130周年をむかえる2016年、宮城学院女子大学に新学部が誕生。時代や社会のニーズに対応する「現代ビジネス学部」、3つの専攻で幼稚園・小学校・養護教諭などを育成する「教育学部」、食品栄養・生活文化デザインの両学科を配した「生活科学部」、日本文学科、英文学科、人間文化学科、心理行動科学科、音楽科の5学科で構成される「学芸学部」の4学部9学科体制に生まれ変わります。

より開かれた大学へ

学長 平川 新



本学は、1886年に宮城女学校として創立され、2016年9月に130周年を迎えます。この節目となる年に、大学の大きな改革を行おうと決意。本学を「開く」ことにしました。

従来、1学部10学科だった学部構成を、学芸学部には教養教育を担う学科を残しつつ教育学部、生活科学部などに再編。学びの「わかりやすさ」と「伝えていく力」を充実させる。これが1つ目の「開く」です。

さらに東北の女子教育を担ってきた大学として、社会の中で活躍する女性を輩出する責務を果たすべきだと考えました。これにこたえるのが、現代ビジネス学部の新設です。多くの方が女性のビジネスパーソンの育成を本学に求めている様子を見ました。社会のニーズに応える新学部の設置、これが2つ目の「開く」です。

現代ビジネス学部の新設は、本学の社会貢献を加速させることにもつながります。地域の中で学ぶことを基本とすることにより、自然に社会貢献につながるような仕組みを作っていく。これが3つ目の「開く」です。こういったコンセプトから、130周年に向けた本学の取り組みを「ヒラケ!ミヤガク」と表現しました。

本学は大きく変わります。しかし、これまで重視してきた教養教育はこれからも大事にしていきます。スクールモットーである「神を畏れ、隣人を愛する」も、建学の精神にある「人類の福祉と世界の平和に貢献する女性を育成すること」についても揺るぎありません。130周年を契機に、そこに新たな価値を足して発展させていくことが、この地域における本学の責務であると考えています。

8/31 現代ビジネス学部 文部科学省から正式認可!

来年4月にスタートを切る「現代ビジネス学部」が、文部科学省から正式な認可を受けました。これを受け本学で記者発表を行いました。県内外からテレビや新聞、雑誌などの関係者が集まりました。





1学部10学科から、 現代ビジネス学部を加え 新たに4学部9学科体制へ!

現在の学部・学科	2016年4月以降の学部・学科		
学生学部 発達臨床学科 児童教育学科 食品栄養学科 生活文化デザイン学科 日本文学科 英文学科 人間文化学科 国際文化学科 心理行動科学科 音楽科	現代ビジネス学部	現代ビジネス学科	95名
	教育学部	教育学科	170名
	生活科学部	食品栄養学科	100名
		生活文化デザイン学科	60名
	学芸学部	日本文学科	100名
		英文学科	70名
		人間文化学科	70名
		心理行動科学科	60名
		音楽科	25名

ビジネス界での今後の躍進を期待しています!



東北経済連合会
高橋 宏明会長
(東北電力会長)

**社会が求める女性を
たくさん育成してほしい!**

社会は“女性の力”を求めています。ビジネス・ウーマンの育成に応援します。



仙台商工会議所
鎌田 宏会頭
(七十七銀行代表取締役会長)

**仙台的経済界に
もっと女性のパワーを!**

世界を知るためには、地元を知ることが重要です。仙台的経済界に女性のパワーを送り込んでください。



百貨店「藤崎」
藤崎 三郎助社長

**誠意を持って対応できる
女性の育成に期待!**

生活関連商品は、女性がキーパーソン。商品開発などの基礎知識を身に付けてください。



Action

「食づくり」による被災地支援で 関東学院大学とコラボレーション！

本学と関東学院大学(社会学部)によるコラボレーション事業が現在進行中です。これは食づくりやものづくりを通して、被災地支援などを行うことが目的で、本学からは食品栄養学科・平本福子教授のゼミ生(3・4年生)が参加しています。

主な活動内容は、被災地(東松島市など)の住民の方々と学生などが協力して「ホーリーバジル」を育て、それらを利用したメニューの開発など。5月には両大学の学生らが苗を植え、その後、収穫まで行いました。7月には関東学院大の学生らが来学して、本学の学生が考案したメニューを実際に試食。8月には関東学院の付属高校生も交えて老人ホームを慰問したり、本学の学生が関東学院大を訪問したりしています。

今後もさまざまな活動を通して、両大学の連携を深めていきます。



銀鮭ランチメニューのPRに「むすび丸」が来学！

食品栄養学科・平本福子教授の協力により発足した「みやぎ銀鮭プロジェクト」。その一環として平本ゼミの学生らが



中心となり、5/26、6/2、3の3日間限定で、銀鮭にちなんだランチメニューを本学うぶカフェにて販売。最終日には、仙台・宮城観光PRキャラクター「むすび丸」が来学しました。

むすび丸は、平本ゼミの学生たちと一緒に、旬の銀鮭を使った「銀鮭のポトフ」と「銀鮭のジャーマンポテト」の2つのメニューをPR。さらに毎月第3水曜日に制定されている「みやぎ水産の日」とあわせて、宮城県のおいしい水産物もPRしていました。



河北新報のコラム「食の泉」で 本学教授陣が記事を連載中！

日本と世界の多様な食文化をテーマに、歴史や文学、栄養学、経済、文化人類学など、さまざまな視点から紹介している河北新報（朝刊）のコラム「食の泉」。現在、本学の教授陣が記事を連載中です。

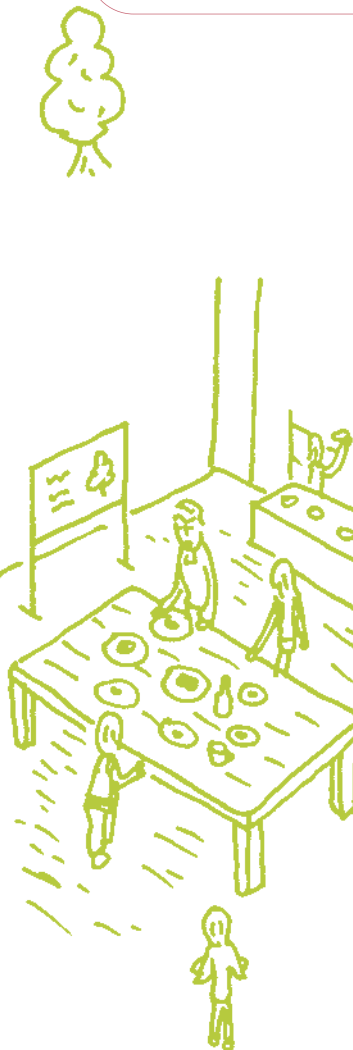
連載がスタートしたのは、今年5月5日から。各学部の教授が持ちまわりで、記事を執筆しています。それぞれ



の分野のエキスパートだからこそ知りえる情報が満載で、読み終えると「なるほど！」と思ってしまうような充実の内容です。

連載中の記事は、紙面以外に、河北新報のニュースサイト「河北新報オンラインニュース」でもご覧いただけます。ぜひ一度、ご覧ください。

河北新報オンラインニュース「食の泉」
<http://www.kahoku.co.jp/special/education.html>





自分のスキルを高めつつ
聴く人の心に寄り添う
「楽しい音」を奏でたい

[取材]
広報室インターンスタッフ
齋藤真帆 (人間文化学科2年)

フルート奏者
白戸美帆さん

——まず、フルート奏者になろうと思ったきっかけはなんですか？

フルートとは高校生のときに入部した、吹奏楽部で出会いました。周囲は経験者ばかりの中、ほぼ私だけが初心者で。しかもフルートは音が出るようになるまで、結構ハードルが高いんです。そこで「負けたくない！」と懸命に練習を重ねるうち、いつしかフルートそのものの魅力にハマっていった感じです。

——どんなところに魅力を感じましたか？

どんな楽器も、練習をした分だけ上達しますよね。それではじめは「小さな目標をクリアしていく達成感」が心地よかったです。そして音を出せるようになると、今度は「仲間と一緒に音を奏でる」楽しさに目覚めました。フルートで、主旋律も奏でられるし、伴奏もできる。どんな楽器とも合わせられるし、いろいろな曲が演奏できる。それが本当に楽しくて。

——音楽科を卒業後、プロの奏者に。奏者として、どんなことを大切にしていますか？

奏者としては「オーケストラ」と「ソロ」、



「フリーランスの奏者になることへの不安は？」との問いに「不安はあるけどアンテナを張りつつ、人ととのつながりを大切にしています」と白戸さん

技術指導のみならず、学生のやる気向上のため話を聞きながらレッスンの日も。「本人が楽しくなければ、続きませんから」

現在は神奈川県で子育てをしつつ演奏活動を行う。「技術向上を目指すだけでなく、お客様の心に寄り添う音を奏でたい」

2つのケースがありますが、それぞれ気をつけべき点が異なります。オーケストラの場合、すでに音ができあがっている中にエキストラとして参加するので、それを壊さないよう気を遣います。準備期間は3日から、最も短い場合で前日リハの1回のみという場合もあります。できるだけ音資料を聴き、早めに現場へ入って、その空気感をつかむようにしています。ソロの場合は構成を自分で行うケースが多いですが、いわゆる「挑戦曲」だけだと独りよがりになることも。お客様が今、何を聴きたいか。季節感や顔ふれなどを配慮して、フランス良く構成することを心がけています。

——講師として指導もされていますが「教える」ときに大切にしていることは？

まずは何といつても「フルートを楽しんでもらうこと」です。フルートは音が出せるようになるまで、ちょっと時間がかかりますから、その間にモチベーションが下降してしまう学生も少なくないんです。歯並びや唇の厚さなどの関係で、良い音が出るポジションは人によつてさまざま。そのポジションを探る作

業をしつつ、「音が出たらまず、何が吹きたい？」という近々の目標を立てて、やる気を少しでも維持できるようにしています。

また、ある程度演奏技術が高い学生の場合同、モチベーションが下がるのは「壁にぶつかったとき」。そういうときもやはり「なぜフルートが好きなの？」という原点に立ち戻るように促します。フルートで、人の息で音を鳴らす楽器だから、メンタル面が音に出やすいんです。そういった意味では、歌に近いかもしれませんね。

——今後の展望について聞かせてください。

奏者として、コンスタントに演奏会を企画するのは非常に、ワウのいることなんです。子育て中ということもあつて、つい「無沙汰になりがちなんです。私は石巻出身なんです。過日の震災では、傷ついたふるさとの人たちを勇気づけようと、二味線とのデュオ演奏会を行ったんです。そのときとても喜んでもらったことが忘れられなくて。こんな風にチャレレンジングで、かつお客様に喜んでもらえる演奏会を、もっともっと企画していきたいですね。

Profile 白戸美帆さん

2006年3月、宮城学院女子大学学芸学部音楽科フルート専攻卒業。同年秋から翌年7月までフランス・パリに留学後、2008年8月に帰国。同時にフルート奏者としての活動、および本学での講師をスタートする。現在は子育てに奮闘しつつ、演奏活動・講師として活躍中。直近では2015年12月5日に宮城学院で開催のチャペルコンサートで、オルガンとのデュオ演奏会を予定している。

硬式テニス部

- 部員数：13名
- 活動日：毎週月・火曜
- 活動場所：テニスコート

学科や学年の枠を超え
みんなで楽しくテニスをしています！

モットーである“みんなで楽しくテニスしよう！”の下、明るく、楽しく、活動しています。部員は、経験者と未経験者が半々ぐらいで、学科もさまざま。学科内だけでなく、学科外にもたくさん友だちを作りたいという人には、ピッタリの部活動かもしれません。私自身も入部してから、学科外にたくさんの友だちができましたから。また「先輩・後輩」という運動部特有の上下関係もまったくなく、学年の枠を超えて部員みんなが仲良しです！

もっと部員を増やして
笑顔と笑い声の絶えないテニス部に！

練習は週2回行っていますが（練習中の）雰囲気はとても良く、常に「笑顔」と「笑い声」が絶えません。練習後にはメンバー同士で食事会を開催するなど、コート外でも本当に仲が良かったです。これからの目標は、もっと部員を増やすこと。テニス経験の有無に関わらず、メンバーが多くなれば、自然とコート内に笑顔と笑い声があふれてきますし、これまで以上に楽しくテニスをする事ができますからね。



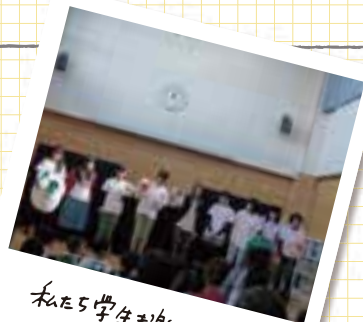
「3-トラリ-」で
ワオ-シングア-ッ！



ダブルスでは、
技術はもろ3人目の
コンビネ-ションも重要ア-ッ！



部長
新堂 光さん
(食品栄養学科3年)



私たち学生も楽しみながら
人形劇を披露！



メンバー同士の仲を良く
チームワークを披露！



齋藤 詩さん
(児童教育学科4年)

サークル紹介 02

おもちゃ箱サークル

- 部員数：32名
- 活動日：毎週水曜
- 活動場所：C401教室

来場者だけでなく
自分たちも楽しみながら活動中！

仙台市内の児童館などでボランティアとして、人形劇やお話会、影絵あそびなどを子どもたちに披露しています。児童教育学科や発達臨床学科など、幼稚園や保育園の先生をめざしている学生が数多く所属しています。モットーは「来てもらった親子連れに楽しんでもらうことはもちろん、自分たち自身も楽しみながら活動すること」。プログラムで使用する人形や絵などはメンバーの手作りで、子どもたちの年齢に応じて内容も変えながら発表しています。

今後はさまざまなイベントに参加し
活動の幅を広げていきたい！

今年4月、仙台フィルハーモニー管弦楽団が主催する、子どもたちがさまざまな楽器とふれあうイベントにサークルとして初めて参加。生演奏にあわせて、子どもたちに人気のダンスを披露しました。子どもたちもとても喜んでくれましたし、私たちも楽しめました。ほかにも、会場内のアテンド役やチケット係も担当させていただきました。今後はこういったイベントにも積極的に参加して、これまで以上に活動の幅を広げていきたいです！

「東北チアリーディング選手権」で
チアリーディング部が総合第3位！

7月12日に岩沼市総合体育館で開催された「第10回東北チアリーディング選手権大会」で、チアリーディング部「RED BULLETS」が総合第3位に輝きました。



部長の梅村万由子さん(生活文化デザイン学科3年)は「点数や順位を気にせず、部員全員で楽しみながら演技したことで、この順位につながりました」と、笑顔で今回の演技を振り返ります。「良い結果を残せたことはうれしく思いま

「全日本学生選抜競技ダンス選手権」に
競技ダンス部の学生が出場！



7月12日、大阪府のなみはやドームで行われた「第53回全日本学生選抜競技ダンス選手権」に、競技ダンス部の学生が出場。部長の千田真佑子さん(児童教育学科3年)と佐々木李佳子さん(日本文学科3年)の2人が、他大学の学生とそれぞれペアを組み、競技に臨みました。

結果は、いずれのペアも第1次予選敗退。「残念な結果でしたが、全国レベルのダンスを身近で感じられたことは、良い経験になりました」と千田さん。さらに今後の目標について「また全国大会に出場して、ひとつでも順位を上げたいです。そして自分自身の技術向上だけでなく、後輩たちの指導にも力を入れていきたいです」と、力強く語ってくれました。

1000「いいね!」突破!

宮城学院女子大学
公式 facebook に「いいね!」しよう!!



キャンパス内の四季折々の表情から旬な情報まで、宮城学院女子大学に関する情報がいっぱいのお宮城学院女子大学 公式 facebook。みなさんのおかげで、見事1000「いいね!」を突破しました!登録がまだの方は、ぜひアクセスして「いいね!」してくださいね!



■宮城学院女子大学 公式 facebook ページ
<https://www.facebook.com/mgu.ac.jp>

編集後記

9月の豪雨、皆さまのお住まいの地域はいかがだったでしょうか。すでに報道、CMその他で話題になっているように、本学は来年度に向けてこれまでになく大きな改変を予定しています。なかでも現代ビジネス学部は注目株です。時代は女性のチカラを求めています。震災復興はもちろん、少子高齢化の進む東北にこそ女性のチカラが必要ですよ。宮城学院は今までも、これからも地域社会に貢献する女性の育成に取り組んでいきます。(MF)



今回は、戦後復興を支援する教育宣教師 J-3の一員として来日し、長年宮城学院に奉職されたマーガレット・A・ガーナー先生を紹介します。

ガーナー先生は約40年間、英文学と基督教の教授を務めたほか、英語劇の指導などでも活躍しました。さらに宣教師としてのお人柄が宮城学院の学生・生徒たちに与えた影響は、非常に大きいものでありました。

ガーナー先生は自分が受けた教育や黒人運動推進を手伝った教会での宗教的体験、アメリカの原子爆弾使用にショックを受けたことなどが自らの人生を方向づけ、導いたと語っています。さらに「選択による責任は負わなければならないが、人間は一人では背負い生きることができない。信仰による精神的な支えが大切である」と説いています。ガーナー先生の教えは、私たちの中で生き続け、受け継がれています。

マーガレット・A・ガーナー(Margaret Ann Garner)先生 略歴

- 1923(大正12)年8月 米国アーカンソー州生まれ
- 1946(昭和21)年 アーカンソー州立大学卒業(英文学・歴史学専攻)
- 1949(昭和24)年 イーデン神学校卒業(基督教教育専攻)
短期教育宣教師(J-3)として宮城学院に赴任
- 1952(昭和27)年 任期を終え帰国
- 1953(昭和28)年 ミッション・ボードから「宮城学院専任教育宣教師」
として派遣され、東京で日本語の研修を受ける
- 1956(昭和31)年 宮城学院に再赴任
- 1958(昭和33)年 法人理事に就任(～1991年3月)
- 1969(昭和44)年 宮城学院女子大学・女子短期大学 宗教部長(～1976年3月)
- 1986(昭和61)年 日本永住権を取得 イーデン神学校から名誉博士号を授与
- 1988(昭和63)年 ミッション・ボードから宮城学院専任教授へ移行
- 1991(平成3)年 定年退職(宮城学院勤務41年7ヶ月) 名誉教授 名誉理事
その後、宮城学院女子大学非常勤講師
- 1996(平成8)年 引退
- 1999(平成11)年 在日50年 イーデン神学校から名誉宣教師を授与
- 2001(平成13)年11月 仙台市にて逝去(77歳)



MG archives

ガーナー資料

ガーナー先生が宮城学院に奉職された1949(昭和24)年9月～1991(平成3)年3月までの活動に関する文書・書簡の原資料・写真および宮城学院に関わった宣教師、関係者に関する収集資料。ミッションボードと宮城学院との関係を知る上で非常に価値のある資料であり、宮城学院の戦後復興、学術交流、留学生の派遣等が細部に至るまで残されているなど、宮城学院にとって大変貴重な資料です。

